



## Surrogacy journey of gay father who opted for surrogacy in India.

### インドで代理出産を依頼した Gay Dad の経験

#### Interviewee

Mr. Hans M. Hirschi

#### Q. プロフィールを教えてください。

スイスで生まれ、一定期間、米国に住んでいたが、学校を終えるためにまたスイスに戻っていた。その後、銀行員としてキャリアを積んだ。1992年からスウェーデンに住んでいて、スイスとスウェーデンの二重国籍を持っている。2001年に今の夫と出会い、現在、結婚して16年目になる。代理出産で生まれた息子の Sasha がいる。

語学の教師をしていて、その後、フィクションの作家となった。それは、育児休暇がきっかけ。スウェーデンでは、両親が合計で1年間の育児休暇を取れる。ゲイカップルの場合は、異性カップルに比べて育児休暇を平等にとる傾向がある。だいたい半々くらいずつ取得することが多い。

当時勤めていた会社の CEO と顔を合わせて仕事をする機会はなく、仕事を辞めて最初の予定より長く育児休暇をとることになり、物語を書き始めた。最初の小説を2週間で書き上げ、それ以来、フルタイムで作家をしていて、副業でコンサルタントとツアーガイドをやっている。

今まで23冊の小説を出版し、1990年代からブログも公開している。自分と夫が、最初に親になるための旅に乗り出したとき、その時に考えていたこと、理由づけ、感情などを書き留めておくことが

大事だと思った。ほぼ毎日のようにブログを更新していて、フォロワーもたくさんいる。このことは、同性婚やゲイカップルによる家族形成の増加に関する世界の動向を映し出すものだ。

ゲイカップルが養子縁組みをすることは西欧社会の大部分では長い間行われていたが、ヨーロッパの多くの国では違法だった。そしてスイスではごく最近、法改正がなされてゲイカップルの養子縁組が可能になったばかり。スウェーデンで最初の養子をとったゲイカップルの子供には、心臓疾患があった。それは異性カップルなら希望しない子供だった。

自分と夫が、家族を作りたいと思ったとき、養子への道は閉ざされていたので、それ以外の選択肢を探すしかなかった。遺伝的どうのこうのということは、気にしていなかった。

#### Q. 子どもを持ちたいと思ってから、インドで代理出産を依頼し、帰国するまでについて簡単に教えてください。

自分は1967年生まれで、夫は1979年生まれ。年齢差があるので、パートナーが親になる心の準備ができるまで待たなければならなかった。自分は元から親になりたいと思っていたし、子供がいない痛みは耐えられないと度々思っていた。特に、経済的に余裕ができてからは、ますますそうなった。ずいぶんまえから子供の名前も考えてあった。最初の子には、Sasha とつけよう。ミドルネームは Daniel Suria だ。これは、夫とインドの代理母に因んでいる。

2009年10月頃、夫とともに、家族作りをスタートさせた。全てのオプションを検討した。しかし、自分の年齢のせいで、スウェーデンで養子を取るのはいとわかった。そもそも、スウェーデン



では、国内養子は年間 0-1 例くらいしかない。法律は、生物学的親子の結びつきを固持しており、ネグレクトされた子供を生物学的親のもとに返して死亡したケースも複数報告されているほどだ。それ以来、法律が改正され、里親として養子をとることができるようになったが、ソーシャルワーカーによるサポートの欠如のせいで、そのようなケースは実際には極めて稀だ。

国際養子に関して、スウェーデンは常に先陣を切ってきた。1950 年代以降、韓国から国際養子がなされてきた。その後、1970 年代以降、チリから、その後ケニアやロシアからの国際養子が行われた。スウェーデンの国際養子は、ペンテコステ派の教会が主催する私立のエージェントによって行われていた。

彼らは、反ゲイで知られていて、もし自分たちが国際養子を取りたいと思っても、大きな抵抗にあうだろうと予想できた。現にその当時、スウェーデンのゲイカップルで、国際養子を許可されたケースは存在しなかった。それで、国際養子も見込みがないと結論づけた。

元々は、代理出産を依頼しようとは思っていなかった。里親を必要とする子供のサポートをしたいと思っていたので。しかし、里親に申請しようとしたとき、ホモフォビアに遭遇した。それが非常に大きな障害になったものの、2010-11 年頃、許可がおりて、待機リストに登録することができ、子供とマッチングされるのを待つことになった。

ついに、2011 年 12 月、里親を必要とする子供がいると連絡を受けた。ペルー出身の 5 歳の男の子で、生まれた時から親から性的虐待を受けていた。彼を引き受けることに同意した。しかし、ソーシャルワーカーが注意義務を怠っていたことが明らかになった。息子がゲイカップル

の家族に引き取られると知った実の母親が反対し、結局、その子を里子にとることはできなかった。その子を里子にもらう話を得るまで、4-5 ヶ月も費やしていた。自分は子供を迎えるために既に会社を退職していたのに。その時、自分の世界が崩壊していったのを感じた。そしてとうとう、代理出産を依頼するという最終的な決断に至った。インドで代理出産を依頼できるのは 45 歳までだということ思い出して、焦った。

自分と夫は、ウェブサイトを検索して、ボンベイにあるエージェントを見つけた。そのエージェントは 20 年もの経験を持っていて、評判も良かった。そしてそのエージェントに直接連絡を取った。その時、全てスカイプを通して行った。スウェーデンでエイズや性感染症のテストを行い、プロセスを進めることを確認した。

その時わかったことだが、夫は、父親になることにそれほど熱心ではなかった。なので、まずは自分の精子を使用することにした。インドに渡航して、精子を採取した。インドを訪問したことは、とても奇妙な経験だった。

その後、卵子ドナーを選んだ。インドでは、卵子ドナーと代理母は別の女性だ。それは、代理母が子供に愛着を持つのを避けるため。ウクライナや南アフリカの白人の卵子ドナーを選ぶこともできたが、インド人の匿名ドナーを選ぶのが一番安い方法だった。自分と夫が調べたところでは、スウェーデンでは、身長が高い方が、社会的に成功する可能性が高いということだった。だから、卵子ドナーも身長 175cm の女性を選んだ。このドナーはあるエージェントの特別パッケージで見つけたものだ。

当時のインドでは匿名ドナーだけが許可されていた。何枚かの写真とプロフィ





ールは付いていた。ドナーはインド人の祖先を持ち、高学歴だとわかった。だから、息子はインド人とのハーフになる。

### Q. インドの代理母や彼女の家族と会いましたか？

妊娠はしっちゃんかめっちゃんかだった。代理出産は普通の妊娠と違うし、エージェントからの情報は過剰だった。2週間後、妊娠していたのは双子で、そのうち一人は徐脈だとわかった。グーグルで調べたところ、それは致命的なことだと知り、不安だらけになった。しかし研究によると、それはかなり広くみられることで、妊娠初期の場合、検出されないままのことがほとんどだということだった。幸い、Sashaは無事に成長し、たくさん写真が送られてきた。

代理母はとても小さな女性だったので、健康上の問題がたくさん生じた。評判の良いエージェントを選んだので、代理母はよくケアされ、良い病院で扱われた。代理母は子宮頸部が短く、流産のリスクが高かった。だから妊娠6ヶ月で、彼女は病院に入院することになり、最後の1ヶ月はずっとベッドの中で過ごした。Sashaは8ヶ月のとき、帝王切開で生まれた。

代理母、彼女の夫、代理母の3人の子供たちにも会った。それで思ったのは、彼女はとても小さいので、西欧人の大きな子供を産むのは無理だったのではないかということだ。帝王切開は代理出産ではごく普通のことだ。

代理母はとても丁寧に扱われたと思っているし、代理出産の報酬によって、彼女と彼女の家族の生活は劇的に変化したと思う。彼女は子供に良い教育を与えら

れたらろうし、多分、家も買っただろう。

### Q. インドの慣習や文化の違いにフラストレーションを感じたり、戸惑ったりしたことはありましたか？

自分(の代理母)が妊娠している間、保守的なロビーグループからインド政府へ強い圧力がかかっていた。2012-13年頃に、複数のスキャンダルがあり、政治論争にまで発展した。

この頃、ノルウェー王室の王女のスタッフが夫とともに代理出産を依頼する目的でインドに渡り、子供を連れて帰れなくなったことが報じられた。子供が現地で身動きが取れなくなり、こみ入った問題を解決するために王女自身がインドに渡ったと言われている。<sup>1</sup>

2012年、インド政府は、ゲイカップに対する代理出産の提供を禁止した。自分がビザを受け取った後、1週間かそこらのことだ。しかし、この法改正について誰も教えてくれなかった。その年の終わり頃、やっとそのことを知った。ゲイカップルが関わったケースのスキャンダルが続き、違法になったとのことだった。

妊娠初期の興奮の後、自分たちが正しいことをしているかどうか、懸念が生じてきた。それに加えて、Sashaの監護権を得ることができないのではないかとこの恐れも生じてきた。彼が生まれたとき、医療ビザはもはや発給されていなかったのので、代わりに旅行ビザでインドに渡航しなければならなかった。

インドに到着して2日後、Sashaが生まれた上品な病院を訪問した。2時間後、Sashaが連れてこられ、写真を撮ったりした。SashaはすぐにスタッフにICUに連れ

<sup>1</sup> Norway princess in secret India trip to play nanny. Reuters DECEMBER 4, 2012



戻された。その夜、自分と夫は病院に泊まった。Sashaの代理母は遺伝的母親ではなかったので、法的に言えば、インドの枠組みでは彼女は存在しないのと同じだった。遺伝的な父親として、自分はSashaに会いに病院に行けたが、夫はできなかった。

Sashaが生まれて36時間後、息子は自分と夫の手に委ねられ、その次の日に退院した。その前に、エージェントが手配した写真家がやってきて、スウェーデンのパスポート用にICUのなかで息子の写真を撮っていった。そして、フォトショップでチューブやワイヤーを消して、目を付け加えた。自分が遺伝的父親だと証明するためにDNAテストを行った。その後、法的プロセスが開始された。

#### Q. 子どもが産まれてからの法的手続きはどのように進みましたか？

スウェーデンには代理出産法は存在しない。だから違法ではないが、法的にはグレーゾーンだ。法律は時代遅れだ。インドでは、子供の母親は存在しない。スウェーデンでは、出産した女性が親だという法律があるだけ。夫がいる女性が出産したら、彼が父親と推定される。

最終的に、代理母の夫にSashaの父親ではないという宣誓供述書にサインしてもらった。そして、代理母には子供の親権を放棄するサインをしてもらった。

インドでは既にゲイカップルは違法になっていたため、Sashaを出国させるためには賄賂を効果的に配らなければならなかった。インド連邦政府の内務省にレターを送り、出国を許可するレターに個人的にサインすることを求めた。ボンベイの警察署長にも賄賂を贈った。彼らは自分たちと大臣の間にいる全ての役人に賄賂を払わない限り、出国までに3ヶ月は

かかるだろうと告げた。最終的に、要求された金銭を支払い、2-3週間で許可状をもらうことができた。考えてみると、賄賂に支払った金銭は、代理母に払った金額をはるかに超えていた。代理母は、夫の給料の10年分を受け取ったというのに。

彼女は代理出産を2回やった。だから、夫の給料の20年分に相当する額を受け取ったことになる。また当然のことだが、賄賂の支払い方法について教示してくれたエージェントのスタッフにも支払いをした。

スウェーデン側の手続きは、スムーズでポジティブな経験だった。Sashaは24時間以内に市民権を取得し、パスポートもその後すぐに発行された。スウェーデンを出発して5週間後、Sashaとともにヨーロッパに帰ることができた。ヨーロッパについての途端、空港ですぐさま聞かれたのは、母親はどこにいるのか？ということだった。法的な観点からみると、空港に到着した時、Sashaには法的な後見人はいなかった。自分が法的な後見人になるのに2ヶ月かかり、夫が養子にするのにはその後、6ヶ月かかった。スウェーデンでは2004年から同性カップルが共同で養子をとることができるようになった。

息子にはスイスの市民権も与えたかったが、スイスには代理出産を禁止する法律があり、それを文字通り実行するとスイスの法律に違反したことになる。だからスイスの法律家を頼った。スイスの市民権は、自分の生まれ育ったところに結び付けられている。自分の故郷は比較的にリベラルだったので、法律家の助けを得て、2年後に息子の市民権を得ることができた。

結論からすると、もしあることがスウェーデンでできるなら、同じことはスイスでもできるはずだと思う。興味深いこ





とに、スイスでは **Sasha** の法的後見人として代理母の名前が載せられている。しかし、近い将来、これを変えたいと思っている。

自分たちは、合計 17 個の凍結受精卵を持っていたが、インドの法改正により、プロセスを続けることができなくなった。インドの代理出産は現在とても制限されていて、自分で子供を産みたくない金持ちの女性だけが利用することができる<sup>2</sup>。自分と夫は、翌年、ネパールで代理出産を試みたが、現在その可能性も閉じられた。インドから運び込んだ受精卵はネパールで失われた。その後、タイでも代理出産の可能性を求めた。

現在、養子の可能性を再度、探っている。夫はソーシャルワーカーなので、現在、自分の地域で養子サービスの一部に関わっている。養子を再度申請しようと思っている。来週、養子を取るのに適格かどうか、調べるつもり。来年のどこかの時点で、もしかしたら養子をとることができるかもしれないが、今は不透明だ。

#### Q. インドで代理出産を依頼して、よかったと思うことは何でしょうか？

評判の良いエージェントを選び、代理母もとても良い扱いを受けていた。だから自分はなにがしかの貢献をしたと思っている。代理母に会い、互いに感謝の気持ちを表した。しかし、そうはいつでもやはり、自分たちは正しいことをしたかどうか、いまだに葛藤がある。

自分は息子を可愛がっているが、ホモフォビアに由来する反代理出産論者が特権的だの何だのと批判してくるかもしれない。自分たちの立場はかなり弱いもの

だと感じている。ゲイたちは、親になる権利を長い間持っていなかった。そのことで、友人を失うこともあったが、1980年代を生き抜いたことを幸運だと感じている。それでも、自分たちがやったことが正しかったかどうかという心の葛藤は、しつこく残っている。

2013年にBBCのインタビューを受けた。彼らは、その場にラディカルフェミニストがきていることを言わなかった。その女性は自分のことをこっぴどく非難した。自分は、まるで代理母を搾取する奴隷ハンドラーであるかのごとく見なされた。しかしこれは、代理出産は不必要であるという西欧社会のマインドセットだ。自分の代理母はとても良い扱いを受けていたし、多額の金銭を得て、家族の生活は劇的に変わった。代理母は搾取されているとは思わない。

#### Q. 親としての経験は人生をどのように変えましたか？

子供を自分の腕の中に抱いた瞬間から、それは選択ではなくなる。親になることを決意するまでは、それを望むか、望まないか、選ぶことができる。そのいい面、悪い面を検討することもできる。しかし、子供がそこにやってきた途端、それは選べるようなものではなくなる。

もちろん、自分と夫は **Sasha** を迎えたことに興奮していて、後悔はない。しかし、やらなければならないことはたくさんある。それはいいことも悪いこともある。例えば、**Sasha** はよく嘘をつく。最近も、店からファンタのボトルを盗んで、スクールカウンセラーの世話になった。カウンセラーは、**Sasha** は非常に成熟しているので進級は可能だろうとのことだっ

<sup>2</sup> 事実とは異なっているが、話されたままとした。



た。カウンセラーからのその電話に非常に安堵した。

父親になることは、素晴らしい旅で、自分がやるはずのものだったと思っている。Sashaの出生について、自分は、この経験を必要としていた。子供の目を通して再び世界を見るという経験をもらった。それは再発見のプロセスだ。子供が、人として成長して、発展していくのを目撃するのは最高に素晴らしい経験だ。

**Q. 代理母や卵子ドナーとどのような境界を作りたいを望みますか? 遺伝子検査などを使って、半きょうだいや、卵子ドナーなどを探することに興味がありますか?**

将来、Sashaの遺伝的きょうだいを見つけることができるのを期待して、DNA検査を受けた。

**Q. 子どもに代理出産のことは話していますか? どのように受け止めていますか? 何か質問はしてきますか?**

自分と夫はSashaに対して全てオープンにしている。卵子ドナーや代理母の写真も見せている。彼の名付け親の一人はインド人だということも話している。彼の出生に秘密はない。何でも、オープンにしている。Sashaは時々質問してくることがある(半年に1回くらい)。しかし、自分のことはスイス人やスウェーデン人だと思っているようだ。

Sashaのために、なぜ自分たちが代理出産を依頼したのかを説明するための本を書いた。それは、彼のためだけに書いたもの。それから、自分のブログを読んで、アドバイスを求めてくる人のためにも、もう何年もの間、その本は役に立っている。現在、amazonで本を売っている

が、最低価格しかつけていない。インドでもネパールでも、代理出産は禁止されたので、今はそれほど重要な本ではなくなっている。

**Q. サポートグループに参加していますか?**

スウェーデンのゲイ解放のための組織があるが、それほどサポーターではなかった。ヨーテボリのサポートグループで歓迎されていると感じたことはなかった。

ゲイとレズビアンは、この問題に関して、実際のところ同じ立場ではない。レズビアンはそのための手段を持っているが、ゲイ男性にはそれがない。

アプローチしたサポートグループのほとんどが女性の参加者で、そこでは激しい嫌悪感を示された。代理出産はフェミニストの概念で奴隷と結び付けられている。自分たちはそのようなグループには参加しないと決めた。

よかったのは、スウェーデン社会はとてもオープンだったこと。ゲイの親だからという理由で、路上で差別的なコメントを言われたことは今までない。男性は子供を育てることができないと信じている善意の年配女性から、注意されたことはある。ゲイの父親であることより、父親になることの方がはるかに難しい。特に、ヘルスケアシステムは母親だけにフォーカスしている。一般に、子供を産むまで、助産師がずっと寄り添ってくれる。妊娠しない父親の場合、自分をこのシステムに順応させる必要がある。

LGBTQフレンドリーだと認定されたクリニックに行ったが、実際にはそこで父親差別(fatherphobia)の経験をした。それは、ゲイだから差別されたのではなく、男が子育てしているということに対する差別





だった。そのような差別があると認識した。Sashaが6歳になって、学校のヘルスケアシステムに移行したのでほっとした。

自分たちがゲイだという事実が、親としての資質に問題を引き起こすことはないと思う。他の人たちと同じように、もし子育てで何か問題があったとき、友達や家族にアドバイスを求める。しかし自分の母親はもういないので、良いアドバイスをくれる親族の女性らに相談する。自分たちは、このネットワークを利用している。

スウェーデンでは、ゲイに特化したサポートグループはもはや必要とされていない。スウェーデン社会はリベラルだから。

#### Q. その他、コメント

スウェーデンで法律がないことは、ある意味、実際にはやりやすいこともある。例えば、インドで出会ったデンマークの依頼者は、デンマークに入国するために6ヶ月間も待たなければならなかった。

スウェーデンでは、国際養子は、韓国、チリ、ケニアから親から子供を引き離すものだと非難を受け、停止になった。現在、養子になった子供達が、自分たちが誘拐されたかどうかを知りたがっており、そのことについて、スウェーデン政府が大々的な調査を行っている。

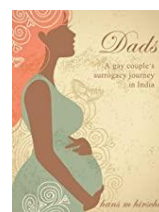
Hans M. Hirschi [Link](#)

スウェーデンを拠点とする作家、トレーニングエグゼクティブ、LGBTの権利活動家。スウェーデンとスイスの国籍を持つ。

現在は夫 Alex、インドでの代理出産によって生まれた息子 Sasha とともにスウェーデンのヨーテボリで暮らしている。

著書:

Hans M Hirschi 2014 *Dads: A gay couple's surrogacy journey in India*, Yaree AB.



Hans M Hirschi 2017 *Last Winter's Snow*, Beaten Track Publishing.



(2021年11月)

@YURI HIBINO